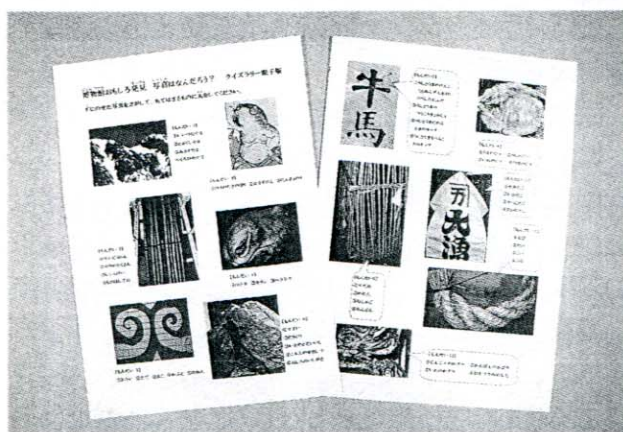


博物館だより

第57号

2003.1.21

Nagano City Museum



クイズラリーに挑戦中!

博物館では、昨年の10月から毎週土曜日にクイズラリーを実施しています。これは、土曜日の小中学生の入館が無料（子どもウェルカムデー）になったことをうけて、博物館に親しみを持って、楽しく利用してもらうことと、クイズをきっかけに資料との対話の楽しさ、新たな発見の喜びを実感してもらうことを目的にはじめました。問題用紙は一般向け、小学生を対象としたジュニア版、親子で楽しく挑戦してもらう親子版の3種類5枚です。

クイズは単に○、×で答えるのではなく、例えば「人びとは水害から家を守るためにどんな工夫をしてきたのでしょうか?」のように、参加者が展示資料

を見て考えたことを答えてもらうようにしました。解答後は、展示解説員による説明を聞きながら答え合わせをします。ここでは、チャレンジしてくれた一人一人に応じたアドバイスをもらえるのが特徴で、参加者からも大変好評です。クイズをステップに自分なりの問題、疑問を持ち、調べ、解決するようにつながればと考えています。

普段は静かな展示室も、土曜日はちょっとした探検気分を味わえる、スリリングなクイズフィールドになります。みなさんもぜひ挑戦してみてください。〈右上写真は一般向け、ジュニア版、左下写真は親子版の問題用紙〉

(降幡浩樹)

ライトダウンの試み

— 星空は復活するか?! —

◆はじめに

年々増え続ける屋外照明、特に上空に漏れ出す光の増加によって星空環境は悪化の一途をたどっています。しかし、星を見えにくくしている原因を少しでも除去すれば再び星空が戻ってくるはずです。そこで、今回友の会と協力して「ライトダウンをして大観望会」という初の試みをしました。

◆ライトダウンの計画～依頼

ライトダウンを実施するためには周辺、特に夜間営業している商店や事業者の協力が不可欠です。今回は博物館から半径1.8kmの範囲の、特に屋外照明が多い33店舗・事業所(下図)に依頼するこ



とにしました。正式な依頼文書と普及のチラシを作り、事前に1軒1軒まわって当日午後6時30分からのライトダウンのお願いをしました。

◆大観望会

10月12日(土)は幸運なことに天気に恵まれ、予定していた日程をすべてこなすことができました。「やさしい天文教室」「望遠鏡取扱教室」「ライトダウン観望会」「天体写真教室」「40cm望遠鏡公開」など盛りだくさんの内容でしたが、それぞれ多数の参加者があり、盛り上がりしました。

◆ライトダウン

一番のイベントともいえるライトダウンですが、午後6時過ぎに博物館前の公園でライトダウンを待つことにしました。参加者数はこの時点でピークを迎え、約200人以上が集まっていました。6時25分、公園の照明が消えると一斉に歓声が上がりました。照明に阻まれて見えなかった星たちがたくさん見えてきたからです。しばらくはその場で星空を観察したり、公園外の照明の様子を見ながら、少しずつライトダウン効果を感じつつも、明るい長野の空の実態を改めて認識することができました。公園の照明は消えても中心市街地の強い屋外照明のため、西から北にかけての空は白く光り、ほとんど星が見えませんでした。

◆結果

後日、ライトダウンを依頼した商店・事業者アンケートを行いました。

・回答 33件中18件(回収率55%)

・協力した 13件、協力できなかった 5件

中には全面的に消してくれたところもありました。一方、協力できなかった理由としては営業上の問題や、フランチャイズ店のため本部の許可がない限り照明を消すことはできないという所もありました。しかし、そんな中にも次回は協力したいという店舗もあり、予想以上に協力的であったことは収穫でした。

(大蔵 満)



ライトダウンを体験する参加者たち



ライトダウン前



ライトダウン後

公園の照明以外は変化がないように見えますが、よく見るといくつか消灯が確認できます。



◆総合講座とは何か

これまで「善光寺地震と長野盆地」(平成9年度)、「川」(平成10年度)、「盆地を囲む山々」(平成11年度)、「道」(平成12年度)、「長野盆地の生活環境」(平成13年度)と毎年テーマを設定して、歴史、民俗、考古、地質、植物の各分野からテーマにアプローチし、総合講座を企画構成してきました。この講座では、テーマに沿った見学場所の選定、資料の事前準備作成を学芸員が行い、見学地を巡検するという方法で事業を行ってきました。テーマに即して人文科学、自然科学の両分野から総合的に取り扱う意味で総合講座と称しています。

◆講座の反省と視点

こうした従来の講座の進め方は、参加者が受け身になりやすく、各回が分野ごとの縦割りの内容で寄せ集めの講座にすぎないなどという多様な反省点や問題点を抱えていました。

こうした反省点にたって、参加者が能動的に参加できる形態、継続していける内容、成果を残していく活動、発見する楽しさを実感できる方法、文字通り総合講座といえる内容等、このような視点から新たな総合講座の方法論を模索しました。

◆新たな総合講座の概要

「千曲川を歩く—千曲川沿いの神社・仏閣めぐり—」と題して、まずは千曲川沿いに歩いてみると何がわかるのかという目的で講座を企画しました。千曲川は私たちの生活と多方面で関わりが深いと説明されますが、それはどういうことなのかを実際に歩いて見ることによって理解しようという講座です。

10月から毎月第4土曜日に設定して総合講座は



▲「千曲川をあるく」講座のようす

始まりました。現在参加登録は26名です。

◆実施した総合講座から

10月26日(土)は、ガイダンスのあと、千曲川堤防を歩いて、小島田町、対岸の松代町柴を歩きました。

〈参加者の発見や疑問点〉………
○字はいつ頃できたのか○帰化植物はいつごろからあるのか○河川敷のクルミの木はいつ頃植えられたのか○金井池の水はどこからくるのか○河川敷の水田や畑は私有地か○川と集落との関係○水制とは何かなど

11月23日(土)は、会議室で現在の堤防ができる前の堤防を地図に色塗りする作業などを行ってから、千曲川沿いの小島田町、真島町を歩きました。

〈参加者の発見や疑問点〉………
○川と道と人の関わりをもっと知りたい○小島田地区の河川敷と異なり、リンゴや桃畑が多い○狭い地区の中に多くの神社や寺があるのはなぜか○地名が昔の姿を表しているようで興味深い○寛保の満水の跡を確認できた○清水神社の地口灯籠の文字は何か○人々の信仰の強さを感じた

◆「千曲川をあるく」通信の発行

講座では、歩いて興味関心を持ったことを追求し、次回までにまとめて形にした通信を作成します。講座を実施したまとめが重要だと考えています。どんな発見や疑問点があったかを集約し、情報の共有化として通信を発行しています。



「千曲川をあるく通信」1号

◆今後の展望

今年度は3月までの予定ですが、来年度以降も「千曲川をあるく」事業を継続して行っていきたいと考えています。また、参加者も登録制で行っていますので興味関心を持たれた方は、随時ご参加ください。

(山口 明)

異界妖怪探訪② ～狸の化け物～

里山に住む狸や狐は、かつて私たちの良く目にする動物として、昔ばなしにとりあげられたり、「小豆洗い」「見越し入道」といった妖怪の正体にされたりしてきました。そして多くの場合、彼らは人間をだます悪者や、人間に退治される間抜けな動物として登場します。何も知らない狐・狸にとっては迷惑な話といえます。

ところで信州にも狐や狸に関する話がいくつも残っています。そのなかから今回は狸についてちょっと変わった話を紹介します。

◆飯山市土倉の狸大明神

飯山市の北部、山を越えれば新潟県という所に土倉という集落があります。この集落を通過して新潟県へ抜ける道の雑木林のなかに「狸大明神」と刻まれた石碑が二体建てられています。一体が嘉永2年(1849)、もう一体が明治25年(1892)と刻まれています。

土地の人によると、かつてこの辺では狸が人をだましたり、いろいろ悪さをして人々を困らせていたそうです。そこで狸の悪行をやめさせようと狸を神様にまつり上げたのが、この石碑とされています。人間に迷惑をかける存在を退治するのではなく、神様として讃えることによって悪行をやめてもらおうとしたのです。しかし、嘉永2年に造立ののち、同じ石碑が50年後にもう一体作られているところを見ると、この作戦はなかなかうまくいかなかったのかもしれません。



◀ 狸大明神
(明治25年造立)
(写真提供
飯山市教育委員会)

◆狸の掛け軸

「昔、鎌倉にある建長寺山門再建のため、お駕籠に乗った高僧が、村の庄屋の家に泊まりながら勧進をしてまわった。しかしその様子はとても奇妙

で、庄屋の家の部屋まで駕籠を乗り入れ、食事も給仕に運ばせると人払いをして決して人と会おうとはしない。給仕がそばで聞き耳を立てると、べちゃべちゃ犬がものを食う音が聞こえる。また風呂に入ったところをのぞき見すると、ふさふさとした尻尾が見えた。出立の時、記念に書を書いてもらったら、ミミズがのたくったような文字で何が書いてあるのかわからない。意味を聞いてもごによごによ言って聞き取れない。皆、不思議な思いで見送ったあと、しばらくして風の便りに、あの高僧は実は狸で、どこぞのお寺の飼犬に正体を見破られ噛み殺された、との話が届いた。」

このような話が、関東から中部地方にかけて残されています。そしてなかにはその時に書いてもらった掛軸が今も残っているところもあります。

現在確認したところ、信州にも狸の和尚が書いたと言われる掛軸が下伊那郡泰阜村に1つ、松本市中山に2つ残されています。そのうち泰阜村のものと松本市の1つは同じ人の手によるものでした。どちらも同じ大きさの画面に「南山寿不驚不崩」の書と、顔が人面で体が獣の不思議な生き物が描かれていました。この生き物は白澤と呼ばれる中国に伝わる想像上の獣です。白澤が人の前に姿を現すと、良い世の中になるといわれたり、江戸時代には旅行中にその姿を写したものを懐中しておけば道中が無事に過ごせるなどといわれました。おそらく掛軸を描いた僧は、白澤の縁起の良さを踏まえて描いたのでしょう。しかし、それをもたらした村人の多くは得体の知れない動物として怪しみ、やがてこのような絵を描くものは、狸の化け物に違いないと考えたのではないのでしょうか。(細井雄次郎)

▶ 狸の和尚が書いた掛軸
(泰阜村学校美術館所蔵)

